

5
(日)

神を否定する愚かさ

愚かな者は心の中で言う／「神などいない」と。

彼らは墮落し、忌むべきことをした。

善を行う者はいない。(一)

4/

詩人が直面していたのは、人々が自分の欲求を満たそうとして義と公正とを踏みにしり、強者が弱者を食い物にする世界でした。このような事態が蔓延していた根本原因は、人々が心の中で「神などいない」と言っていたからです。神の存在を否定するとき、人間は必ず自らを神として欲望のままに生きるようになります。「心の中で」とあるように、私たちも信仰生活を続けながら、心の内では神などいないかのように考えてしまう危険を抱えているものです。これに対して詩人は、神がいらないのではなく、神の存在を心から信じ、その神の前で善を行おうとする人こそいないのだと語ります。神に対する揺るぎない信仰こそ、社会を悪から救い出すことになるのです。「神などいない」という疑いの心を退け、「神が正しき人の輪の中におられる」(5)という信仰を堅くしようではありませんか。